

本日9月28日、桐光学園小学校創立20周年記念の日に「校長室だより」第100号を発行することができました。開校11年目から校長職に就き10年が経過しました。校長になり、数か月が経過し日々の仕事に慣れてきたころ、それまでに自分の中にとどめていたことを皆さんにお伝えしたいという思いが強くなりました。それが「校長室だより」の始まりでした。2006年11月の1号発行からまもなく10年、目標としていた100号が発行できて、少しほっとしています。

さて、1996年の4月1日に開校、入学式で1期生を迎えた日のことを、そして2002年3月に1期生を送り出した日のことがついこの前のことのように感じられます。この小学校の教育で大切にしていることは、「子ども一人ひとりを大切にし、目の前にいる子どもの“今”を受け入れる」です。このことに多くの方々共感していただきましたし、そのような学校ならとお子さんを入学させてくださった方もたくさんいらっしゃいます。もちろん開校21年目の今でも、小学校で最も大切にしていることであり、それを多くの人たちに知らせることが学校説明会などの目的ともなっています。

子ども一人ひとりを大切にすることは誰が考えてもよいことであり、そうでなければならないことです。学校の主役である子どもたちはその中で安心して生活できるようになります。安心は心の安定につながり、たとえばいじめという形で自己表現をしなければならないような心の状態を作らないようにすることができます。このような環境を作るために改めて思うことは、今さらお伝えする必要はないことでしょうか、保護者の皆さんにも、学校、学年、学級で自分の子どもと共に生活する多くの子どもたちのことを受け入れて、大切に思う気持ちが必要であるということです。自分の子どもを第一に考えるのは当然のことですが、子どもは一定の集団の中で生活し、学び、成長していきます。その集団をぬきにして一人ひとりの子どもの成長は考えられません。保護者と教職員が心をつなぐというのは、自分がして欲しいと思うことを伝えるだけでなく、自分にできることは何かを考え実践することです。20周年を機会にさらに大きく飛躍するためにも、しっかりと学校の基盤を作ることが求められています。皆さんとともに歩む学校であり続けるために、子どもたちの輝く未来のために私たちはこれからも努力を続けていきます。

## 【塾通い】

輝緑祭の日には毎年何人かの卒業生が小学校に顔を出してくれます。毎年のように顔を見せてくれる卒業生もいます。1年に一度多くの卒業生に会える一日を私たちは楽しみにしています。

3人の卒業生（2期生）と話していると、小学校から高校卒業までの間の塾通いが話題になりました。3人のうちの2人は、在籍していた12年間一度も塾通いをしていませんでした。もう一人は小学生のころ、週の半分以上は塾通いをしていたそうです。塾通いをしていた彼は、自分でこう言いました。「自分は小学校のころそれなりによい成績をとっていた。でも、あるとき満点をとっても親はほめてもくれなかった」「あれから自分はおかしくなった（笑いながら）」そんなことを言いながら、私に「どうしてそうなるのかな？」と問いかけました。私は「小学生のころは勉強する楽しさがまだ分からなかったのではないかな」としか答えることができませんでした。他の2人はどう思っていたのか。でも、今では立派に大学を卒業して社会人として活躍しています。

小さいころから、疑問に思うことを調べたり、考えたりすることを楽しめる子がたくさんいます。好きなことや興味があることが誰にでもあるので、そういう機会に巡り合わない子はいないはずです。ちょうどそのとき興味を持ったことが親やまわりの人から評価されにくいものであったとしても、だから駄目とは言わないようにしたいものです。子どもたちはたくさんのお話を学ぶのですから。

## 【楽しさの質】

毎日が楽しいと感じられるのは素晴らしいこと。しかし、その「楽しさ」は子どもの成長に伴って変化していきます。自分好きなことやしたいことができれば楽しい、という段階から、日々の生活の充実が楽しさに結びつくようになるまで大きく変わっていきます。

その過程で、楽しさの感覚を共有できるときとできないときがあることを多くの子どもが経験します。どちらがよいとか悪いというような問題ではありませんが、楽しいと感じることがらはそれぞれの成長に合わせて変わっていきます。

友だちと楽しさの感覚を共有できないことを感じた子どもはとても不安な気持ちになります。友だちの今の思いを知ろうとする子、自分の価値観で相手に接し続ける子がいます。前者は、必要に応じて自分自身を変えて行こうとすることができる場合がありますが、後者は友だちの気を引くためにどうしたらよいかということを考えるのが精一杯のことが多いです。

子どもが友だち関係で悩むときにはこのようなことが原因であることもしばしばあります。子どもの思い、子どもの悩みに寄り添って、少しでもいいですから子ども自身が前に進めるように力になってあげてください。